

## 第55回埼玉文芸賞選評

### 【小説・戯曲部門】

昨年は応募数が58点と急減し、いささか気が揉めたが、今年は82点と盛り返し安堵した。50代、60代にも厚みが増し、相応の力作も混じった。準賞の「家守」（塚原理恵氏）は水準を超えている。地域中核病院に勤務するベテラン看護師、望月万里子の眼を通して現代医療の様々な問題点をクローズアップした。また彼女を取り巻く親兄弟の介護、人手不足・過労等の仕事上の難問がさり気なく挿入され、ドラマに厚みを加える。医療関連の術語も吟味され、読みごたえを感じさせる。

今一つの準賞は川原和三氏の「貉の抜け道」。古い、手傷を負った忍び（忍者）の酷薄な末路を描いた作品。傷を癒すべく落ち着いた村で、住職に手解きを受けて始めた画業は茂十に救いをもたらす。だが、その最期は切ない。プロットは整い、文章も簡潔でそつがなく入念なつくりの短編。この2つの作品のほかは準賞には届かなかったが、意欲に満ちた作品も見られ、行く末に可能性を感じる。

あいざわ ともつよ  
(相澤 与剛)

### 【文芸評論・エッセイ・伝記部門】

菅野節子の文芸評論「倉片みなみの心 『もの言わぬ半生ありき』」を準賞に選んだ。原稿用紙98枚の力作である。いい文章を読ませてもらった。「正直で不器用な人」三ヶ島葎子と「感情に溺れず、静謐で知的な」倉片みなみの母娘を見事に描ききった。そうであるが故にただ一点、みなみが、早世した葎子と親友だった原阿佐緒から求められて再会し、しばらく後にその場の阿佐緒を描いた文章の分析がやや甘く、その不備を目立たせてしまった。阿佐緒と葎子のアララギ追放はよく知られた事件なので詳述を避けるが、再会の場で葎子の若き日の一首を代表作扱いした阿佐緒を「哀れ」に思ったみなみの「心」を分析する箇所だ。「感情に溺れず、静謐で知的な」みなみを描く菅野氏の見事な文体に、一瞬の緩みが生じている。そうではあっても、いい作品に出会えた喜びが大きい。一気に読み終えることができた。ちなみに三ヶ島葎子は現所沢市の出身で、資料室がある。

佳作として小此木彩、クルシン京人、七尾美日、高橋克己、山田暢子の5氏を選んだ。文芸評論が11本（外に伝記3本）と多く、原稿用紙100枚規模の作品が9本もあった。

きとう けんいち  
(佐藤 健一)

## 【 児童文学部門 】

応募作品数は37編。埼玉文芸賞を選出することはできなかったが、年々、作品のレベルは上がっている。

準賞1席は津山こういち「でこぼこぼっちとロク」。鬱屈を抱えた少年2人が、天候が悪化した山中で道に迷ったことから、否応なく互いを意識し、こころを開いていくさまを瑞々しく描いた作品。遭難から救助までのシーンは迫力があり、読者を嵐の山中に引き込む。

準賞2席は山口実恵「風を追いかけて」。アルビノの少女が、歌うことをとおして仲間と出会い、高校の文化祭のステージで自らを輝かせるまでを描いた作品。繊細でありながらも強気の主人公のキャラクターが魅力的。

佳作1席はSO<sub>2</sub>「防具屋イーギョ」、2席は飯田一郎「おかえり、お父さん」、3席はほりえたつよ「木漏れ日の向こうには」、4席は堀川文子「童話キャラと日本」、5席は福智玲於風「サトル君とジェイの 誰ともふれあえない旅」、6席はあい「鳩が見た戦場」。

もりの  
(森埜 こみち)

## 【 詩部門 】

詩部門の応募数は、単行本8点を含む49点であった。選考会は2月2日さいたま文学館にて開催、川中子義勝、野村喜和夫、北岡淳子の3委員が担当した。丁寧に協議を重ねた結果、埼玉文芸賞は見送り、準賞に向井千代子氏『ヴァージニア・ウルフのいる風景』と砌アイコ氏『曇りの昼寝』の2作品を決定した。向井氏は長年研究された英国の女性作家ウルフをめぐる作品の他、日々の感慨を銜いなく表現、円熟の境地を纏められ、砌氏は「どこから来て／どこへと還る」のか、という視点を定め、モチーフに対し無駄のない表現を追求された。

佳作には洗練された文体で物語性のある作品を収めた前田利夫氏の『二番地の内田さん』、音楽言語という新たな表現を提示された関根健人氏『s o l r e s o l (ソルラソル)』、繊細な独自の感性を追求された原島里枝氏『声』、擬音を用いた津山こういち氏「わふわふ」に決定した。また奨励賞は、更なる充実が期待される儘田佳奈氏「気づかないもの」を選出した。更に多くの応募を期待したい。

きたおか    じゅんこ  
(北岡    淳子)

## 【 短歌部門 】

17歳から92歳までの応募者52人の中から、下村すみよの歌集『空色の箋』が選ばれた。

下村氏は75歳。「短詩形文学」の代表でもある。憲法9条を守る運動などに参加したり、「8・15を語る歌人の集い」を運営したりするなかで短歌を紡いできた、アクティブな歌人。埼玉県歌人会の副会長でもある。

時代を詠いつつも観念的にならず、生活者の視点から確かな表現を目指す。対象に向かう真摯な姿勢に好感が持てること、詠いかたが素直で爽やかなことが授賞理由となった。

- ・世の中は楽しいことでいっぱいだ砂場を目指す五歳三歳
- ・線量5されど車の通行可「止まるな」「降りるな」「窓を開けるな」
- ・児を連れてウクライナより避難する女性に重なる引き揚げの母

ほかに佳作6編、奨励賞には17歳の高校生が選ばれた。

おき  
(沖 ななも)

## 【 俳句部門 】

今回の応募数は去年より8編増え95編(そのうち単行本は7編)であった。

新しく稲田眸子を加え、田口紅子、尾堤輝義が選考にあたった。コロナ禍も下火になったとは言えまだ心配の残る中、2月2日の午前から会合を持った。

その結果、今回は埼玉文芸賞に推せる作品は無く、準賞に句集応募の柴田獨鬼氏(71歳)『あかときの夢』と、原稿応募の伊藤恭子氏(78歳)「ゆすらうめ」に決定した。

原爆忌核なき日まで鶴を折る 獨鬼

読初の葉にされて神籤かな 恭子

準賞とは紙一重であるが佳作に6名(句集2名、原稿4名)そのうち2名は30代40代の若い俳人である。あえて選んだのは将来への期待を込めてのことである。

奨励賞は17歳の豊島縁さんの「永訣」を選ぶことができた。坂戸ろう学園の生徒である。

AIで俳句を詠む時代がくるのかと思いながらの選考であった。

おづつみ てるよし  
(尾堤 輝義)

## 【 川柳部門 】

応募は40点、3委員協議により準賞2名、奨励賞1名、佳作6名を選出した。

準賞1席は岡田孝道氏「平和」昨今の戦争を直接批判することなく、一日も早い終結を願った句が、際立っており秀逸であった（ひまわりが見渡す限り咲く平和）。

準賞2席は塚田健次氏「古い楽」退職後の生活を楽しみながらの作句で悠々自適さが滲み出た作品となっている（好奇心見つけに今日は街へ行く）。

奨励賞には野澤美羽氏「何時かのはなし」思春期の想いを奔放に恋の歌等で昇華させた点が評価できる（初恋とともに溶けるはソーダ味）。

佳作には野川清氏「漏れる水」、鎌倉八郎氏「姉女房」、天野敏香氏「命のスープ」、田口慶子氏「亡母と私」、谷口雅子氏「ある日ある時」、佐藤京子氏「負けおしみ」の6名である。

何れの方も長年投句されているベテランで日頃の研鑽の結果が良く出ていた。その他今回は選ばれなかった句の中に「かな」「けり」等の切れ字が散見されたのが、今後の課題である。

にしまつ ただよし  
(西松 忠義)